

山本信人ほか著

『東南アジア政治学——地域・
国家・社会・ヒトの重層的ダイナミズ
ム——』

成文堂 1997年 v + 5 + 259ページ

大形利之

本書は、東南アジア諸国が抱える諸問題をさまざまな角度から全体的に説明、分析していこうとする新しいタイプの著書である。東南アジアの政治に関する日本語で書かれた著書は増加する傾向にあるが、蓄積はまだ少ないと言える。それだけに今回、本書が斬新なアイデアをもった若手研究者らの手によって刊行されたことは実に大きな意義がある。

折しも、東南アジア全体が注目を浴びている。昨年夏、タイから始まったアジア通貨危機が東南アジア通貨の価値を次々と下落させ、ここ10年間ほど高成長に沸いていたのがまるで嘘のように、各国は危機的状況を迎えている。しかし、通貨危機の問題は単純に経済面だけの問題ととらえることはできない。東南アジア諸国の経済構造上の問題は、政治構造上の問題に根深くつながっているからだ。汚職や癒着を生みやすい行政機構の非効率や不透明さ、それに伴って生じるハイコスト・エコノミー、不健全な金融機関の抱える莫大な不良債権問題などが今回の問題の根底にあった。著者らも指摘するように、東南アジア地域をめぐる日本の研究動向は依然として経済的な側面ばかりが強調されすぎており、政治面は手薄で一般によく理解されていない。それゆえ、今回のような東南アジア経済の急変をみると、あれほど順調な経済発展を遂げてきていたのに一体何が悪かったのかとただただ結果に当惑させられるばかりになってしまう。

著者らは「本書は、大学専門課程の学生から大学院生、あるいは実務に携わる方々を対象に書かれた東南アジアの政治に関する入門書である」(iペー

ジ)としている。そこで問題は本書が入門書としての目標を達成できているのかどうかであるが、この点はまずは問題がなからうと思う。何よりも本書は理解しやすく、学びやすい。本書の構成は以下のとおりである。第1章「近代東南アジア地域システムの形成と動揺」、第2章「地域国際関係とリージョナリズム」、第3章「国家の政治と国民の政治」、第4章「多元的社会の構造と変容」、第5章「暴力・開発・人権」、第6章「インターネットで収集する東南アジア情報」。各章のタイトルを見て分かるように、この種の著書は一般的に各国別の記述が多いのだが、本書は東南アジア全体の政治を総合的に理解するというところに専ら力が注がれており、東南アジアの政治全体について学べる便利な1冊となっている。本書が斬新であるところは、第6章のインターネットを使った東南アジア研究の手ほどきである。情報化社会の今日、インターネットの普及は拡大の一途をたどっているが、情報収集や資料収集に便利なツールを如何にして研究に活かしたらよいか、非常に丁寧に解説されている。

最後に本書を読んで多少気になった点を指摘しておきたい。第1章(20~22ページ)でブーケとファーニヴァルという東南アジア研究においてはそれぞれ「二重経済」論や「複合社会」論という用語で親しまれている代表的な2人の東南アジア研究者の名が出てくるが、彼らの議論が紹介された書名が本文中にも巻末の「東南アジア研究文献紹介」にも見当たらなかった。これは本書作成上の事情を知らぬ者のない物ねだりなのかもしれないのだが、最低限、引用文献か参考文献を示す注記は入れておいた方がよいのではないか。第2章で「開発独裁」(86ページ)という用語が用いられているのに対して、第3章では「開発体制」(121ページ)という用語がほぼそれと同義に用いられているようであるが、はたして同じなのかどうか。また第4章でイスラーム復興の現象を取り上げて、それを「イスラームの主流化」(171ページ)という言葉を用いて議論を進めているが、「主流化」とは誰が最初に使った言葉なのか。以上。

(東京農業大学非常勤講師)